

※ PDF 内のリンクをクリックすると
GoogleMaps の地図が開きます。



諭鶴羽山頂、頂止社の前庭からの眺望。紀伊水道から太平洋へと大海原が広がる360°の大パノラマ。ここからの日の出や夕日が美しい。(写真提供・諭鶴羽神社)

採燈大護摩供法要殿修 諭鶴羽修験復興

酒本
幸祐

[ゆづる は やま
諭鶴羽山](#)のことを知ったのは、ラジオを聞いている時だった。「福澤諭吉の諭に鶴の羽の山と書く」と紹介していた。[兵庫県淡路島](#)の最高峰で、標高 608 m ともいった。随分と珍しい山名だと思いき、鶴と羽のイメージから何か物語があるのではと思った。なにしろ淡路島は『古事記』にあるように伊弉諾、伊弉冊の二神によって生まれた日本発祥の島と伝えられているのだからである。

諭鶴羽山の資料を見たが、そこには淡路島南端にあり、東西に連なる諭鶴羽山地の最高峰と地理的なことしか記載がなかった。

そのことより、山頂には[ゆづる は じんじや
諭鶴羽神社](#)という社のあることを知ったことの方が強く印象に残った。諭鶴羽神社の資料を探すとともに、南あわじ市の観光課にも問合せ、資料を送ってもらった。

手元の資料を見ていくと、神社の創建は開化天皇の治世と伝えられているとあり、自然崇拜から始まったとの説も書き添えてあった。

平安時代になると修験道の一大道場として、一帯に 28 の伽藍が立ち並ぶほどの隆盛となり、その名は京の都にまで伝わり諭鶴羽参りが盛んになった。



神社入口の石の鳥居。凜とした空気がただよっている。

『枕草子』にも「峰はゆづるはの峰あみだの峰いや高の峰」ともあった。

また、南あわじ市から送ってもらった諭鶴羽神社の由縁には2つの伝承が記載されていた。

1つは「五大修験」のタイトルがあり、以下の由縁があった。

西天竺さいてんじくの霊神が、第十代崇神天皇の御世に、五本の剣を東の空に向けて投げられ「我が縁のある地に留まれ」と誓いたもうた。1つは紀伊国・熊野三山に。1つは下野国・日光山に。1つは出羽国・羽黒山に。1つは豊前国・彦山に。1つは淡路国・諭鶴羽山に留まったとあります。

もう1つは、「元熊野」とのタイトルで、以下のことが記されていた。

「熊野権現御垂迹縁起伝」<長寛元年(1163年)に書かれた文章>によると、甲寅の年、唐の天台山の霊神が九州・筑紫国・英彦山の峰に降臨され、戊午の年、伊予国・石鎚の峰に渡られ、甲子の年、淡路国・諭鶴羽の峰に渡られた後、庚午の年、熊野新宮の神蔵の峰に渡られたと伝えられています。

近年、かつて修験道の盛んだった神社を参拝、取材して歩いている私にとって、これら由縁に出てくる山々はすべ訪ねていて、諭鶴羽神社だけが残っていた。このこともあって諭鶴羽神社はどうしても訪ねてみたいと思った。また同じ資料には、「平成20年、行者の山田智泉氏の諭鶴羽修験復興の志に共鳴する行者達が集まり、修験道を復興させました。」とあった。この文章を読んで、諭鶴羽神社への思いがより強くなった。

神社に電話をすると宮司さんが出られ、修験道の

復興を志した山田智泉さんのことなど教えていただいた。資料には4月第2土曜日に春季例大祭があるともあったので、この日に合わせて神社を訪ねることにした。出発まで1ヶ月以上あり、近くなると再度電話させていただくことにした。

出発まで諭鶴羽神社の知識を得ようと調べた。平安時代以降、修験道の一大道場として隆盛となったことは先にも書いたが、

その後、度々戦乱に遭うこととなる。康正2年(1456年)、戦国時代へと進むこの時代は、淡路島でも戦乱が始まり、全山戦火によって焼失してしまった。天文年間に美作藩主みまさかの助力で18宇まで伽藍を再建したが、天文18年(1549年)に起きた石川紀伊守の乱で再び焼失してしまった。

その後は復興の望がなく、資料を後世に残すため、天文21年、美作の乗蔵らによって、各社堂、神仏を石板に刻み残している。現在、この石板は奥宮・十二所神社に収められている。

その後は、承応年間(1652～54年)蜂須賀・徳島藩主によって、本殿、拝殿が再建されている。これは諭鶴羽の神が藩主の夢に現われ、神社に助力すれば藩も安泰と告げたことによるという。この話は神社を訪ねた時、宮司さんから聞いた。徳島と淡路島は鳴門海峡を隔てて目と鼻の距離にある。

ところが、明治初年に政府の神仏分離令、修験道廃止令によって、ここで諭鶴羽修験だけでなく、多くの修験道の命脈は断れてしまった。

ここからは、後に宮司さんから聞いた話である。明治になって衰退した神社を守る宮司になる者がいなかった。そこで村長をしていた現宮司の祖父の榮次郎氏が引き受け、現宮司まで三代にわたって諭鶴羽神社の宮司として奉仕しているという。

諭鶴羽神社の予備知識は得たものの、神社までの交通手段について調べておく必要があった。南あわじ市の観光課に問合わせると、東京からだ、新幹線で新神戸で下車、JR三ノ宮三ノ宮駅の高架下にあるバスターミナルから高速バスで、神戸淡路鳴門自動



諭鶴羽神社拝殿。どこか温かいものを感じさせた。

車道を通り、陸の港西淡下車だという。ここからは公共交通はなく、市街地へはタクシー移動だと聞いた。淡路島には市内を廻る公共バスはコミュニティバスのみで、車を持たない限りすべてタクシー移動だという。

これまで参拝してきた神社は、公共バスで近くまで行くことができ楽な参拝であったが、諭鶴羽神社へは歩いて登るしかない。標高 600 m 余といえども大きな問題だった。

諭鶴羽神社へは南あわじ市が文化財、史跡として指定している諭鶴羽古道がある。1 つは表参道で、諭鶴羽山の南側、海側に廻る必要があった。登山口までの距離があり、この道は昔の行者道で道は険しい。北側からの道が裏参道で、一般の登山者はこの道に登るが、この道も登山口まで距離があり、登山口からでも約 2 時間かかると聞いた。また道は整備されているとはいえ、裏参道も行者道で、一人で登るのは危険ともいわれた。

車道は、南側からの県道があり、高速から向かう時は、この県道が便利であるが、道幅は狭く注意が必要である。もう一つの車道が上田林道といい、北側からの道である。この道も狭く、一部未舗装の所があり、注意が必要だ。登山口より約 11km と距離もある。

出発前に諭鶴羽神社への登山ルートを思案したが、行くことは決めているのだからと、最終的にはタクシー利用と決めて、前泊する南あわじ市のホテルに着いて考えようと思った。

諭鶴羽神社春季例大祭の 4 月 11 日まで 1 ヶ月を切ったところで、チケット購入などの準備もあり、宮司さんに電話を入れると、「採燈護摩さいとうごまに来られる

んじゃないですか」といわれた。先の電話で修験道の話などしたので、そう理解されていたらしい。神社の資料には採燈護摩のことはなかったので、春季例大祭に参拝と思い込んでいた。もちろん採燈護摩に参加できることの方がありがたい。日時を聞くと、3 月 22 日だといわれた。急遽予定を変更して、採燈護摩に参加することにした。

ありがたかったのは、宮司さんが便利のよいホテルを教えてくれたうえ、当日の朝ホテルまで迎えに来てくださり、神社まで車に乗せてくれ、終了後には、またホテルまで送ってくださるという、本当にありがたいご配慮をいただけることになった。これで準備中に思い悩んでいた問題が一挙に解決した。本当に宮司さんのご配慮に感謝であった。諭鶴羽神社の神様が迎えて下さっているのだと思い、心はまだ見ぬ諭鶴羽神社へと飛んだ。

前泊することもあり、3 月 21 日、好天に恵まれ東京駅午前 10 時半の新幹線で出発した。

緊急事態は宣言されていないものの、コロナウイルス流行のため、新幹線の車内は 4 割程度の乗客しかなく、発券する時に調節しているのだろう、乗客は見事にバラバラに座っていた。

新神戸から JR 三ノ宮のバスターミナルへは少々迷ったものの、予定通り高速バスに乗った。このバスも空席が目立っていた。

神戸の市街地を抜け、[明石海峡大橋](#)を渡ると淡路



タブの木の森に囲まれた拝殿右側の境内。ここで正月に地元の人達が餅を焼いて食べるという。



論鶴羽神社の古い記録が石板に刻まれ納められている奥宮・十二所神社。

島へと入り景色が一変する。淡路島は北の方の島幅が狭く、南に下がるほど東西に広がる勾玉形の島である。島の北方は高い山の間を高速道路が通っているが、島の中央部から南方にかけて広々とした平坦な農地が広がり、大きな集落が点在する、のどかな景色となってきた。そういえば淡路島は玉葱が特産品だと思い出した。

陸の港西淡に到着。この辺りは南あわじ市街の西の外れに当たるらしく、バスターミナルの他は何もない。ここから明日行く論鶴羽山地が遠望できると期待したが、全く平地のため遠くの家並に遮られ見るができなかった。タクシーを呼んでホテルへ向かった。

翌朝、約束の7時より20分ほど早く、手作りの金剛杖を持ってホテル前に出た。ホテル前の広い駐車場は満車状態で、県外ナンバーの車も多かった。コロナ騒動の中でも旅行者が多いのだと思った。何よりホテルが予約できたことを幸運に思った。

予定通り、大型のワゴン車で宮司さんが迎えに来てくれた。後で58才だと聞いたのだが、普段着で現れた宮司さんは若々しく、爽やかで、スポーツ選手を思わせる空気をもっていた。お名前は奥本憲治さんとおっしゃった。

採燈護摩は午前10時から始まるので、あいさつもそこそこに、車中でお話を聞くこととして出発した。

ホテルを出て、神社の裏参道の登山口に廻った。

今日の採燈護摩に来る人がいれば同乗させてあげようということだった。実に心やさしい方なのである。50才くらいの女性を乗せて、三人で上田林道へ向った。

運転する宮司さんの後の席に座り、私の後の席に

女性が座った。

ガードレールがあり、よく整備された急勾配の上田林道に入った。林道らしく道の両側は木々に覆われ、時折、木々の間から景色が見えた。

車中では一番気になっていた珍しい神社の名前について聞いてみた。

諭という字には楽しむ、^{さと}諭すという意味がある。古文書には、遊鶴羽と表記しているものもあるという。はるか昔に山の上空を二羽の鶴が楽しげに舞っていた。それを狩人が矢で射ってしまった。そのことを山の神から諭された狩人は改心し、山上に社を建てたことが、論鶴羽神社の創始であり、神社名の由来だといった。2150年昔のことだという。

今日の採燈大護摩供法要の始まりとなったのは、行者の山田智泉氏が、50年ほど前から神社に来て、境内に小さな護摩壇を作り、一人で採燈護摩供を修していたことにあるという。明治政府によって廃止された修験道の復興を強く願ってのことだったのだろう。山田智泉氏が、50年も昔から神社で護摩供を続けていた理由や、神社との関係については、宮司さんの幼い頃のことでもあり、よく知らないといった。

修験道とは深山幽谷に身をおき、万物に祈り、大自然と一体となることで験力を得て、その験力でもって世の人々の悩み苦しみを除く。またその験力をもって採燈大護摩供を厳修し祈ることで、世の多くの苦しみを除く。山田智泉氏も、生前、祈ることの大切さを強く語っていたと、宮司さんは話してくれた。

山田智泉氏は十数年前、高齢で亡くなられたそうだが、晩年、大日如来像を仏師に彫らせ、採燈大護



論鶴羽山山頂にある頂上社。(写真提供・論鶴羽神社)

摩供が行われている正面の大日堂に、秘仏として安置しているという。

この山田智泉氏の没後、志を受継ぎ、多くの行者が集い平成20年から年1回、春彼岸の頃、諭鶴羽神社境内で採燈大護摩供法要が厳修されている。またこの採燈大護摩供法要には、修験道の各派にとらわれることなく、修験道の行者が各地から集まり採燈大護摩供法要を厳修しているのだという。

上田林道の山頂部に登ってくると、南側の木々が途切れ所から、紀伊水道越しに太平洋へと続く海が一望できた。この山が初日を見る人気の場所ということがわかる。車は30分ほどで神社下の駐車場に着いた。

駐車場脇の登り坂の正面に、木々に覆われて、神社名を彫った社号標と石の鳥居が見えた。鳥居前で一礼して進むと、頭の中を光が突き抜けたような軽い衝撃があった。ああ、神様がいらっしゃる。

諭鶴羽神社の最初の印象だった。

木々に囲まれ薄暗く、中央部に踊場のある20段ほどの石段を上がると、開けた明るい境内に続き、正面に拝殿があった。

奥本宮司さんは準備に入り、一人で拝殿前で手を合わせ参拝のあいさつをした。拝殿は銅板葺で、木製の階段を上がって参拝する造りになっていて、個人的な感覚かもしれないが、寺の空気をもっていた。神仏が習合していた明治以前は、このような雰囲気だったのだろうかと思った。神社のご祭神は、主神が伊弉册尊いざなみのみことで、速玉之男命はやたまのおのみこと、事解之男命ことさかりのおのみことの三柱の神が祀られている。熊野権現の元宮と称えられた由縁であろう。

拝殿右側の境内は、タブの森に囲まれた広場があり一面苔に覆われていた。境内と森との境は判然とせず、一体となっている。この広場では正月3が日、地元の人が初詣に来て餅を焼いて食べるのだという。淡路島では、正月に高山で餅を焼いて食べると



大日堂を開扉する神職と行者。



拝殿前で採燈大護摩供の開始を報告する。



採燈大護摩供前に、奥本宮司の祝詞奏上。



行者によって「収束」の書が奉納される。



巫女による「浦安の舞」の奉納。



大導師・立石光正師による祈願文奏上。

一年間無病息災で暮せるといふ淡路島地特有の風習があるのだという。

拝殿左側の境内で採燈大護摩供法要が行われ、すでに準備が進められていた。中央に結界が張られ、護摩壇が用意され、境内の随所には諭鶴羽大権現と青地に白抜きされたのぼりが立てられていた。

境内は左右合せて500～600坪ほどだろうが、境内はそのまま神社の森へと続いていて、のびやかな景色となっている。

護摩壇の正面、一段高い森の中に、山田智泉氏が大日如来を安置した大日堂があり、その奥に諭鶴羽神社の奥宮である十二所神社があった。

この他、諭鶴羽山山頂には頂上社があり、伊弉諾尊、伊弉冊尊と八天狗が祀られている。ここは春季例大祭の時、御旅所となっていて、神輿が氏子によって担ぎ上げられるという。

今年の採燈大護摩供法要は、大流行をみせはじめていた新型コロナウイルス収束祈願、東日本大震災など頻発する自然災害からの復興祈願、平和と諭鶴羽修験復興祈願、参加者の諸祈願を祈念して厳修された。



地元和太鼓グループ「美鼓音」が大護摩供を盛り上げる。

この時期だけに、神職、行者、参加者全員がマスクにビニール手袋着用ということになっていた。

諭鶴羽神社の採燈大護摩供法要は、神事と護摩供の二部構成となっていた。明治以前の神仏習合の時代は、きっと神仏が融合した形で厳修されていたのだろうが、現在ではこのような形での採燈大護摩供は他に類をみないもので、その意味では本来の採燈大護摩供の復活といえるかもしれない。また、採燈大護摩供に参加する行者も、どの修験道の派に属するかは関係なく、日本各地の行者が参加していることも特筆できる。

午前10時、地元の和太鼓「美鼓音」の勇壮な演奏が盛り上げるなか、結界の外に集合した宮司を先頭に神職、行者が一行となり、正面の大日堂を開扉し、奥宮・十二所神社、本殿の順拝が粛々と行われた後、結界内に入った。

結界の周りには氏子、修験道の信者や一般の登山者など数十名が集い、儀式を注視した。

結界の中では前方に設けられた祭壇前で齋主・奥本宮司による修祓、献饌、祝詞奏上の後、御霊に黙祷の間アメイジンググレイスの演奏があり荘厳な空気が醸された。続いてコロナウイルス収束と平穏を祈ってクリスタルボウルが演奏された。その澄んだ音色は境内を囲む森の梢を抜けてどこまでも流れていくようだった。これらは新しい感性をもつ奥本宮司によるものだろうが、これも新しい時代の採燈大護摩供の形なのかもしれないと思った。

大日堂前で行者による「収束」の書の奉納、巫女による「浦安の舞」と続いた後、神事の最後として、齋主・奥本宮司、行者・立石光正大導師ほか関係者による玉串奉奠が行われた。



護摩壇の火は大きく燃え上がり、熱気は境内に満ち、参加者が唱える諸真言が響き渡る盛況の様子がみえた。



大護摩供終了後、行者に導かれ火渡りの参加者。

採燈大護摩供法要に入ると、道場に駆け付けた行者と大導師との間で行者の心得を試す問答があり、道場を清め邪気を払う法斧、法弓、法剣など行者作法の後、立石大導師によって願文が唱えられ、護摩壇に火が入れられた。

護摩壇を覆った檜葉から白い煙が上がりはじめ、観音経が唱えられ、般若心経、大日如来の真言、不動明王の真言へと続く間に、大きな炎が上がり、境内全体を煙で覆い尽くすほどに燃え上がった。行者も信者も一心に祈り、参加者が願意を書いた護摩木が護摩壇に投入されると、炎はより大きくなり、南無諭鶴羽大権現と繰返し唱えられると、境内全体が

護摩木を燃やし尽して、行者たちは退場となり、参加者全員でご神酒で乾杯した。

その後、護摩壇で準備されていた火渡りとなった。和太鼓が響きわたる中、護摩参加者や一般登山者も、行者に導かれながら火を渡っていった。

こうして神仏が融合した諭鶴羽神社の採燈大護摩供法要が終了した。

採燈大護摩供の後、奥本宮司さんをお願いして、本殿内で正式参拝をさせていただいた。本殿内は質素な造りであったが、温かな空気があり、諭鶴羽の神様をすごく近いものを感じた。今回、採燈大護摩供に参加できたご縁に感謝を申し上げ、偶然から始まった神社とのご縁は、これまで参拝してきた修験の神社の神々のお陰でもあろうと、感謝の念をこめて、玉串を奉奠した。

帰路は再び宮司さんの車に同乗させてもらった。今朝の女性も一緒だった。上田林道を下りながら、出発前にいろいろ思案したことなどが一気に解決し、諭鶴羽神社に参拝できたことに、大きな喜びを感じていた。とともに諭鶴羽修験の益々の隆盛を願った。これも奥本宮司さんの親切なご配慮があったことだった。